

内藤湖南と元朝秘史パスパ文字本原典説

吉池孝一

一

現存する『元朝秘史』は、漢字を用いてモンゴル語を音写したものである。この漢字音写本が拠った直接の底本が、ウイグル文字で書かれたものであったのか、それともパスパ文字で書かれたものであったのかということが議論されてきた(注1)。

服部四郎 1939(注2)は現存する漢字本の表記法とパスパ文字モンゴル語の表記法が合致するという事実によりパスパ文字本原典説を唱えたわけであるが、これに対して村山七郎 1951(注3)は、同じ事実から、パスパ文字本を底本としたとする説、及びウイグル文字本を底本としパスパ文字モンゴル語の表記法を模倣して行われたとする二つの説を同等に引き出すことができる旨、ポッペ氏の説(1950)を紹介しつつ論じた。その上で、諸般の事情より推して後者とみるのが穏当な見解であろうとした。

これをうけて、服部四郎 1951(注4)は「『元朝秘史』の漢字音訳が、蒙古語を表わす八思巴字を漢字になおす一定の方式に従って、ウイグル字本から行なわれた可能性はあると思う。」とする。「八思巴字を漢字になおす一定の方式」という一歩踏み込んだ表現を以て村山説を自説に取り入れた。最終的な服部氏の考えは服部四郎 1954(注5)にみえる。即ち「現存の『元朝秘史』は、八思巴字本から漢字音訳されたか、蒙古語を表わす八思巴字を漢字になおす一定の方式に従ってウイグル字本から漢字音訳された」というものである。

元朝秘史の原典の問題は未だ定説をみていない。どのような説を採るにせよ、現存漢字本の表記法とパスパ文字モンゴル語の表記法が合致するという事実(最重要の事実は、両者共にモンゴル語のtとd、kとgを区別するにもかかわらず、qと については区別しないというもの)があるからには、なぜ両者の表記法は合致するのかということにつき納得のいく説明が必要であろう。

以上、元朝秘史の底本をめぐる主要な論争の概略である。村山七郎 1951 によって秘史の原典をめぐる議論の多くは尽くされており、そうした点においてこの論文は重要なものであるけれども、それだけでなく、当該論文には研究史にとって興味深い指摘がある。それは、内藤湖南(以後尊称は省略に従う)とパスパ文字本原典説との関係である。

二

村山七郎 1951 には次のようにある。

この可能性(現存する元朝秘史がパスパ文字本を底本としている可能性:吉池補)を内藤湖南博士が考へてゐたと言ふ。しかし博士は文書の形で見解を述べた

ことはないようであり、またこの見解の根拠については知られてゐないようである。(村山1頁)

この部分は、注によると小林高四郎 1941 (注 6) に拠ったものであるという。小林高四郎 1941 には次のようにある。

明の洪武初年に漢字音訳された元朝秘史の原典が畏兀児字を以て書かれたとするのが学界の通説であったが、最近服部四郎氏は都嘎爾扎布君と共編の「蒙文元朝秘史巻一」の序文中に該説を否定され、世祖至元六年一二六九年詔して天下に頒行した所謂八思巴文字に、畏兀児式蒙古字本から一旦改写されたものからの音訳であるとの新説を提出された。尤も石浜純太郎氏の教へらるる処に拠れば、内藤湖南博士は夙にかゝる考を抱いて居られた由であるが、言語学の見地から之を主張されたのは服部氏を以て始めとするであらう。(小林 289 頁)

石浜氏がどのような経緯で内藤湖南の考えを知ったものか明らかにすることはできないけれども、内藤湖南にはこれに関わる一文がある。

三

その一文とは明治三十五年(1902年)の「蒙文元朝秘史」と題するものである。

事林広記には、其の丁集に蒙古篆文百家姓あり。即ち真蒙文にして、本邦刻本、字体訛誤多しと雖も、若し善本を得て精訂し、之を書史会要載する所の八思巴蒙文字母に参稽せば、其の綴字の法を得難からざるべく、之より溯りて元秘史を翻して真蒙文本と為すことも或は能くすべき也。(明治三十五年二月三日「大阪朝日新聞」。上は「蒙文元朝秘史」と題する文の一部分。今は『内藤湖南全集第十二巻』151頁、昭和45年、筑摩書房発行による)

ここに言う事林広記の蒙古篆文百家姓とは日本元禄刊本に類するものを指す。これは漢字姓にパスパ文字で音形を注したものであるから、「真蒙文」とはパスパ文字のことである。元禄刊本のパスパ文字には誤りが多いけれども、善本の百家姓や『書史会要』所載のパスパ文字の字母表によって校訂するならば、正しい字形とそれを組み合わせたパスパ文字漢語の正しい綴り字を得ることができると述べている。「之より溯りて元秘史を翻して真蒙文本と為すことも或は能くすべき也。」とは、漢字でモンゴル語を音写した現存の元朝秘史を「真蒙文本」即ち「パスパ文字本」に還元することができるということである。現存の元朝秘史が「パスパ文字本」を底本としたものだと明言しているわけではないが、上の一文はそのような考えがあって初めて出てくる言葉であろう。そうであるならば、明治三十五年(1902年)のこの一文は、パスパ文字本原典説につながる史料と見なすことができる。

四

なお、服部四郎氏がパスパ文字本原典説を本格的に提出した論考（1939）「『蒙文元朝秘史（一）』の序」には次のようにある。

『史学雑誌』第13編第3号（明治35年3月）に内藤虎次郎博士が「蒙文元朝秘史」なる1篇を掲げておられるが、これは、従来漢訳文のみの本が行われていたが、漢字音訳の蒙古文のある本を文廷式が最近同博士に送り寄せたことを紹介せられた1文であって、本書の表題『蒙文元朝秘史』とは意味が異なる。内藤博士の得られたこの本が、実に那珂博士の『成吉思汗実録』の底本となったのである。（服部論文集 165-166頁）

服部氏が、大阪朝日新聞と同年の3月10日発行になる『史学雑誌』によって内藤湖南著「蒙文元朝秘史」に目を通していたことを知ることができる。或いは、内藤湖南の一文は服部氏のパスパ文字本原典説の淵源であるかもしれない。

いづれにしても、管見による限り、内藤湖南の明治35年の一文は、パスパ文字本原典説につながる記録のうち、斯界において、少なくとも日本において、最も古いものである。元朝秘史及びパスパ文字の研究史にとって見逃せない一文と言えよう。

注

- 1) これまでの議論をまとめたものに、斉藤純男 1999（「パクパ字音写元朝秘史について」『日本モンゴル学会紀要』No.29（1998）、53-59頁、1999年、日本モンゴル学会発行）があり参考となる。
- 2) 服部四郎 1939、「『蒙文元朝秘史（一）』の序」1-12頁、昭和14年、文求堂発行。今は『服部四郎論文集 第一巻 アルタイ諸言語の研究』158-166頁、昭和61年、三省堂発行による。
- 3) 村山七郎 1951、「元朝秘史の漢字転写の原典に関する諸見解」『Azia Gengo Kenkyû』創刊号、1-13頁、昭和26年、天理大学宗教文化研究所内アジア言語研究会発行。
- 4) 服部四郎 1951、「『元朝秘史』音訳本原典八思巴字本説について」『言語研究』第19・20号、120-121頁、昭和26年。今は『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究』373-375頁、昭和62年、三省堂発行による。
- 5) 服部四郎 1954、「『元朝秘史』原典の問題について」『言語研究』第25号、52-59頁、昭和29年。今は『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究』373-375頁、昭和62年、三省堂発行による。
- 6) 小林高四郎 1941、「漢字音訳「元朝秘史」八思巴字本原典説に就いて」『加藤博士還暦記念東洋史集説』289-309頁、昭和16年、富山房発行。今は昭和17年再版本による。